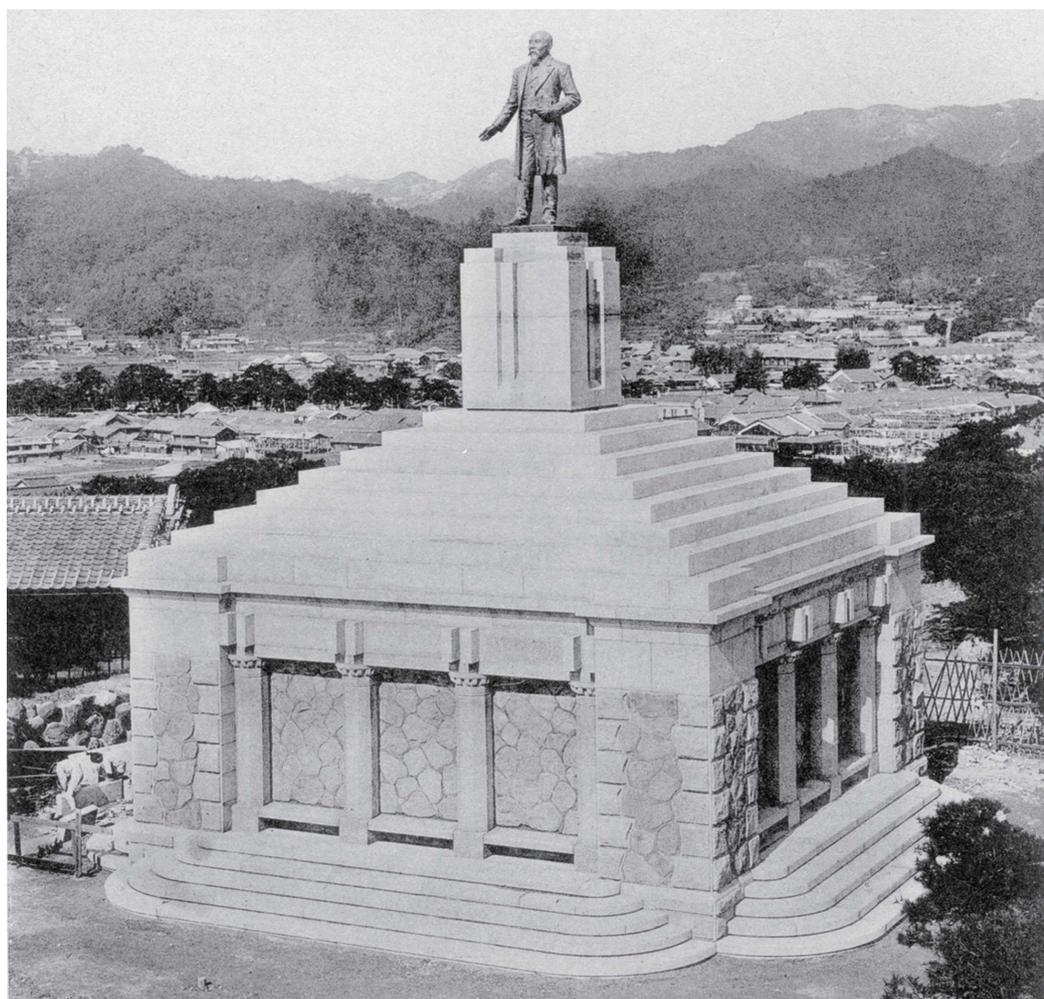


KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 77 号 平成 26 年 7 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



かつて大倉山公園の頂上にあつた伊藤博文像
（『故伊藤公爵銅像建設顛末』から引用）
4面ランダム・ウオーク・イン・コウベ⑦⑦
に記事

ひまわりと神戸

「それは亡くなった妹が「私のことを忘れないでね」と伝えるために姿を変えて訴えているかのようだった」（『はるかのかのひまわり』ふきのとう書房）

大震災が神戸を襲った一九九五年の夏、震災で亡くなった小学六年生児童の住宅跡に不思議なことにひまわりが次々に花開き、太陽に向かう力強い姿が人々の心に希望の灯を運びました。

『あの日をわすれない はるかのかのひまわり』（PHP研究所）『いのちのひまわり はるかちゃんからのおくりもの』（ハート出版）などの児童書にもなった実話です。

震災六年後に実施された「神戸からの感謝の手紙」事業では公募の結果、ひまわりが「感謝」のシンボルフラワーとして選ばれました。『神戸21世紀・復興記念事業の記録』（神戸市）では三〇万本のひまわりが咲くポートアイランド会場や垂水ひまわり街道をみることができます。今年も神戸市内の学校や地域の花壇でひまわりの種まきが行われました。かけがえのないものの記憶、想いも未来へと受け継がれていきます。

教えて！先輩！！—中学生からの仕事探し夢探し 神戸新聞「週刊まなび」編集部（神戸新聞総合出版センター）

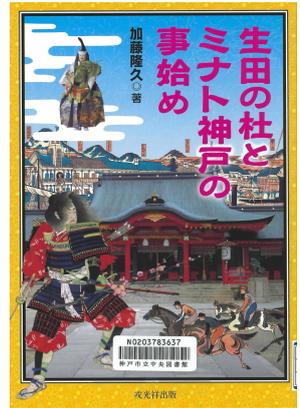
中高生に向けて、兵庫県内で働く「先輩」たちが各々の仕事の魅力について語りかける。保育士、警察官、獣医師、パティシエ、書店員、陶芸家など職種も多彩だ。

外からでは分かりにくい仕事内容や、その仕事ならではの苦労話、就職にいたる経緯、そして何より仕事で得られる喜び。進路を考える始める中高生にとって、身近な場所ので活躍する職業人達の生の声は、大いに参考になるだろう。

生田の杜とミナト神戸の事始め 加藤隆久（戎光祥出版）

著者の加藤さんは生田神社の宮司で、愛してやまぬ神戸の街と生田神社にまつわるエピソードや歴史を紹介している。

「生田の杜ものがたり」「神戸歴史ものがたり」「ミナト神戸の事始め」「語り継ぐ神戸」の四章からなり、写真や絵図も豊富で幅広い層にもわかりやすく書かれ、神戸の様々な顔を見ることが出来る。



よみがえる神戸 危機と復興契機の地理的不均衡 デビット・W・エジントン（海青社）

震災後の神戸における復興過程を、詳細なデータをもとに検証した力作。著者のデビット・エジントン教授は、震災当時京都に滞在しており、平成七年から十年間、継続的に現地調査を行った。被害の状況から、行政による復興計画の策定、住民の反対運動やまちづくりへの参加まで、復興の課題が丹念にまとめられている。



神戸謎解き散歩 大国正美編著（KADOKAWA）

神戸の街を不思議と謎解きの形式で案内したもの。六甲山の地名の由来や異人館建築、灘の酒、洋服やスイーツ、スポーツなど神戸ならではの話題に始まり、歴史や産業、人物、文学、自然そして震災など八章にわけ幅広く解説する。全体を通して神戸の豊かな歴史や文化とともに新たな一面も見えてくる。

川西英が手がけたデザインの仕事

KAWANISHI DESIGN WORKS シーズ・プランニング、神戸市広報課編（シーズ・プランニング）

川西英は、『神戸百景』の作者としても知られ、神戸っ子の心に残る作品を多く生み出した。本書は彼の「神戸」「サーカス」「祭」「ポストカード」「記念」「本」「店」についての商業デザインを計四〇ページカラーで紹介する。解説には執筆者たちの思い出が随所に折り込まれ、作品が愛されていることが感じ取られる。神戸の町を描き続けた彼も没後まもなく五〇年。その魅力は今も色褪せていない。

へるん先生の汽車旅行 小泉八雲 旅に暮らす 荻原伸（集英社インターナショナル）

日本では「へるん」と呼ばれていた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の一生は旅の連続であった。ハーンはギリシアに生まれ、アイルランドに育ち、アメリカで新聞記者となり、その後職を求めて日本に渡り、英語教師を務めた。また文学作品を執筆した。また明治二十七年には神戸に滞在して英字新聞「神戸クロニクル」で論説文の執筆も行った。

著者は主に鉄道を使いハーンが旅した道のりを追いかけていく。ハーンがそれぞれの土地で出会った人物やできごとの取材を通じて、彼が異文化とどう接してきたかを探り、作品にどう影響を及ぼしたかを考察する



翔ぶ少女 原田マハ (ポプラ社)

阪神・淡路大震災を生き延びた少女の姿を生き生きとした神戸弁で描いた小説。長田区に住む丹華は、小学三年の時に被災し、両親も家業のパン屋の店も失った。怪我を負った丹華は、近所の精神科医に救われ、この医師と兄妹4人で、新たな家族となつて暮らし始める。少女の成長の物語を縦糸に、避難所や仮設住宅など、復興への道のりを巧みに織り込んでいる。



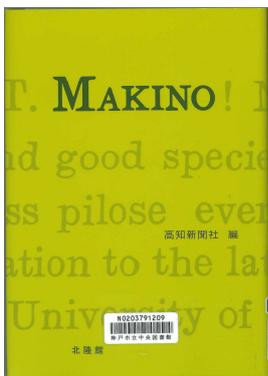
大人の散歩 大阪・神戸の近代化遺産を訪ねて—
大人への散歩 國眼隆一とトイロ・ビ
ジネス編著 (自然総研)

神戸の教会と寺院、旧居留地や神戸港などをカラー写真とともに各六ページで紹介している。現在の様子だけでなく、歴史的経緯やその建設技術にも思いを巡らせている。所在地とアクセス、見学や問い合わせ先も載っているのので、本を片手に興味のある場所を訪ねてみるのも面白い。

MAKINO—牧野富太郎生誕150年記念
出版 高知新聞社編 (北隆館)

牧野富太郎といえば、我が国の植物学の基礎を築いた人物と言っても過言ではない。

この本は、高知県の新聞社が郷土の偉人を取り上げた連載記事に加筆したものだ。牧野と神戸、兵庫との縁の深さには驚かされる。神戸市の「六甲高山植物園」は、日本で最も古い高山植物園で、牧野の指導を受けて一九三三年(昭和八)に開園した。また、兵庫県の県花「のじぎく」は、一八八四年(明治一七)に牧野が高知県で見出し命名したものである。牧野がその出版に情熱を傾けた『牧野日本植物図鑑』の原画や、牧野の採集した標本など貴重な資料の写真も掲載され、牧野をよく知らない人にも楽しめる伝記となっている。



==その他の新刊==

そして、星の輝く夜がくる 真山仁 (講談社)

六甲山シーズンガイド春・夏 根岸真理 (神戸新聞総合出版センター)

阪神国道電車—1975年廃止その昭和浪漫を求めて 神戸鉄道大好き会編 著 (トンボ出版)

理科の散歩道—化学のみちしるべ 栗岡誠司編著 (神戸新聞総合出版センター)

神戸あんな人こんな人 その①

川西和露 明治8年(1875)～昭和20年(1945)

川西和露は、兵庫区東出町の生まれで本名を徳三郎といい、鉄材商を営んでいました。河東碧梧桐に師事、五七五にとらわれない自由律俳句を詠みました。個人誌『阿蘭陀渡』、自選集『和露句集』5巻を刊行、碧梧桐主宰の俳誌『海紅』に創刊号(大正4年)から参画しました。『海紅』には弟の川西英雄(版画家・川西英)も挿絵を寄せています。

和露は古俳書蒐集家としても知られ、『和露文庫俳書目』を神戸の俳誌『ひむろ』に連載しました。その古俳書は現在、天理図書館に収められています。

大正13年、和露は明治以後の活字版の俳諧書570冊を神戸市立図書館に寄贈しました。当館ではそれをもとに俳諧関係の図書を充実させ、昭和5年に『神戸俳諧文庫目録』を発行しました。現在、文庫は解体され一般蔵書に組み入れられています。本の扉には「和露文庫」の蔵書印がくっきりと押されています。

朝顔摘んでそれをどうせうとせぬあいだ
草の上はぬくいみかんもぐ
とんびが鳴いた鳥が鳴かすのやろ
海の空の汐つばい一つ星

『和露句集』より



大倉山と伊藤博文像台座

備前岡山藩主池田光正は、曾祖父池田信輝・祖父輝政が荒木村重の花熊城を落城させた記録として『撰津国花熊之城図』を作成させます（八木哲浩「池田家文庫『花熊之城図』考」『地域研究いたみ』十四号）。

花熊城の規模、また池田方の布陣などが付近の地図の中に記録されているこの図中には大倉山が描かれ、「金剛寺山」と注記されます。これは「広厳寺山」の誤記で、古く大倉山は麓にある寺の名から広厳寺山とよばれていたと考えられています。

江戸時代に入り、元和三年（一六一七）、当地は尼崎藩領となり、戸田氏が初代領主となります。ついで寛永十二年（一六三五）に青山氏が二代目藩主になると、貞享元年（一六八四）、青山家の墓所が山上に営まれさらに貞享三年（一六八六）には、現在の尼崎市大物にあった安養寺が山麓に移されて青山家の菩提寺となり、それ以降この山は安養寺山と呼ばれるようになります（『生田のいまむかし』生田区振興連絡協議会）。

明治十九年（一八八六）に測量された地図『仮製図』を見ると大倉山の南半分は墓地となっていて、青山公墓地の文字も見えます。頂上の標高も現在の四三・一メートルとは大きく異なり、五五・七メートルありました。

明治八年、安養寺山の大半は官有地となりますが、払い下げにより実業家大倉喜八郎の所有となり、別邸「安養山荘」が山上に建築されます。明治三十一年、かつて県令であった伊藤博文がここに宿泊した際、大倉に宛てた礼状に「昼夜涼風吹不斷神戸第一の眺望且避暑地に有之」と安養山荘を詠みました（武岡豊大

「大倉山公園由来」『鶴翁餘影』所収 鶴友彦）。この礼状の写真は『故伊藤公爵銅像建設会』（故伊藤公爵銅像建設会）に掲載されています。明治四十二年、伊藤博文が暗殺されると、「偶々神戸市を中心として、公の銅像を建立する議が起つて居たが、敷地に適當の処が無く行悩んで居た。ソコデ翁は其の別荘を公が生前非常に好んで居たことを思ひ起して、銅像建設地として神戸市に提供し、同時に公園として市民に開放したならば、公の英霊に対する手向ともなり、又た神戸市民の休養安息場ともなる可し」（『大倉鶴彦翁

民友社）、伊藤の銅像を建て公園として公開するという条件で、翌年八月、大倉は所有する安養寺山の土地・別邸を市に寄付します。

市では寄付者の名前をとって安養寺山を大倉山に、安養山荘は伊藤の雅号をとって春畝館と改名し、明治四十四年に大倉山公園が開園します。大倉山の最高所に建てられた伊藤の銅像の除幕式も行われました（『神戸市史』第三集 社会 文化編）。

フロックコートを着用し、自身が起草の中心となった帝国憲法草案を手にする伊藤博文像（表紙に写真）は高さ十尺（三・〇三メートル）ありました。原型製作は小倉惣五郎、鑄造は久野留之介によります。台座を設計したのは京都大学初代建築学科教授の武田五一です（長谷川堯『日本の建築』明治 大正 昭和「四 議事堂への系譜」）。その構造は「四面方形の石造」で、「下層は野面ら石を崩れ積とし上層は階段造りに、畳積」で「面積三十尺方」・「総高さ三十一尺五寸」がありました（『故伊藤公爵銅像建設願末』）。

その後、昭和十年に神戸市公会堂の建設計画が持ち上がり、建設予定地である大倉山の頂上にあつたこの像は台座とともに西側、現在の所在

地に移されることになりました。

ところが台座と銅像を移動したあと、公会堂は戦争にもなう鉄材の使用制限などにより建設中止となり、さらに銅像自体も金属類回収令により「お国のため」赤ダスキを掛けられて率先して供出されてしまいます。この前後のいきさつについては『神戸の本棚』66号をご覧ください。

現在残る台座上部の形状、「階段造りに畳積」は階段状ピラミッドをあらわして、これには暗殺された伊藤の霊廟としての意味あいが見えられています。そのかたちは国会議事堂中央塔と共通していますが、これは単なる偶然ではありません。

大正七年（一九一八）、設計コンペティションにより採用された国会議事堂のデザインは、台座の設計者武田五一の愛弟子である吉武東里らが師の意匠を取り入れて設計したものです。明治憲法起草の中心にあり、初代を含め四度の内閣総理大臣、初代枢密院議長・初代貴族院議長を歴任し近代日本政治のかたちを方向づけた伊藤博文。「命をかけた国政への参画の道」を議員に自覚させるべく、その霊廟のモチーフを国会議事堂のてっぺんに据えたのです（鈴木博之『日本の地霊』講談社）。